（二六一）

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　適斉

一五半時過両御拝、夫ゟ御庭御順拝被遊候、御臨書暫在之候

一九時過大奥へ被為入御膳如例、九半時過例日御湯被為召候

一為伺御機嫌勘解由重記御目付七右衛門・所左衛門罷出何茂御逢御くハし被下候

一弾正罷出御用在之候

一御裏役申達御庭方月々渡御定金之義当年ハ御裏下駄・草り等別段之御入用

　多ニ付御奉行へも月々拾匁ツヽ増金之義共之申立候所達之通来正月ゟ相渡候旨

　甚十郎申聞候事

一七半時過大奥御膳如例、五時過ゟ御締切如例、御三ノ間ニて自賛歌かるた為

　御拾御前様御透見被遊、畢而左膳始何茂へみかん八ツツヽ被下置之

一大奥御寝、御夜詰四半時過引

　　　　十二月十五日　晴

一御目覚六半時表へ被為入　　　　　　　　診　宗甫

一六時過村松町出火、依而御近火ニ者無之候得共風筋不宜故常邸ゟ梶川沢之丞

　為御見舞被遣、鳥度御逢在之候

一五半時前両御拝定式御手備在之、夫ゟ御庭御拝被遊候

一殿様六半時御供揃ニ而御登城、御退出懸被為入、九時過御対顔、夫ゟ御一所ニ大奥

　江被為入御対面、寒中ニ付御目六御取替せ在之候、中君御同座御膳被召上候

殿様御帰座御酒差上之、御皿物みかん御小弁当被召上候筈御汁玉子御皿やき石かれ

　　　　　　　　　　　　　　　干　鱚

　被進、相済中君御帰坐御菓子陸の花差上之、大奥ゟも被進之、御同伴御庭廻

　御供一統罷出弾正近江十兵衛随従、御内庭ニ而蜜柑御直ニ御投与在之候

　御庭前殿様へ両番一統伺御機嫌頂戴物御礼申上、中君御供一統被為召

（二六二）

　御噺被遊、御供頭次郎右衛門・幸右衛門伺御機嫌罷出候、殿様へ御医師三人罷出ニ付

　御目見被仰付、御帰殿七半時頃

　　　　御弐所様へ　　　　八寸重二　大福餅　奥表一重ツヽ　表之分御前ニ而被下之

　　　　殿様ゟ

　　右者御成ニ付被進之　　但小重入ニ而治部引込ニ付被下取斗

　　　　金百疋　　　　　　　　　　　　　金兵衛へ

　　　　同五十疋ツヽ　　　　　　　　　　五郎大夫ゟ岩吉迄

　　　　武者中本二冊ツヽ　　　　　　　　熊吉　岩吉へ

　　　　唐子たこ一ツヽ　　　　　　　　　留三郎　門太郎　愛五郎へ

　　　　金壱歩二朱ヲ　　　　　　　　　　台子四人　ふね両人へ

　　　　鳥目二貫五百文　　　　　　　　　両役所小遣四人　水へや三人

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御附へや小遣四人

　　右者毎々御入之節何角御世話申上ニ付被下之　十兵衛持参相渡ス

一七半時過表ニ而御そば被召上弾正御下タ被下候、同刻過大奥御膳如例

一去暮相極候当暮御側向ゟ台子小遣等迄被下之義、手廻し宜出来ニ付伺之上惣而

　今日被下ニ取斗、細記ハ爰ニ略ス

一頭取被下之内新御定外心配ニ付百疋被下之、一口去暮ハ九両三歩之外ニ相成在之候故

　当年ゟ都合拾両と相成被下、当春来家鴨追々数増一統彼是世話多手数相増

　候ニ付一統へ　御内証出弐歩　両役所小遣共留箱掃除甚難渋ニ付同壱貫文被下取斗候事

　　　　金壱朱　　　　　　　　　　　　　御鉄砲懸り　吉田喜十郎

　　右者当春来少々者取扱事も在之当年限被下之、懸り之義ハ御免申渡以来ハ

　　御稽古懸り頭取ニ而相心得居候旨申聞候事

一前記大福餅於御前左大夫・主一外詰合へ被下之、畢而御締切如例

一御夜詰四半時過引　　　　一金兵衛鎌落前ゟ退去致候事

　　　　十二月十六日　陰寒強

（二六三）

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　主一

一五半時過両御拝被遊、夫ゟ御庭御順拝被遊、御臨書如例

一寒中為伺御機嫌小林又兵衛并適斉父子順庵罷出ニ付此段申上ル

一右同様金兵衛義御広式御用人迄罷出候

　　　　石かれ一細魚十ヲ　　　　　　　　甚十郎

　　　　石かれ五　　　　　　　　小は中　多き

　　右者到来ニ付差上之、たき今日上りニ付御二所様へ差上之、召上り相成

一九時過大奥へ被為入御同座御膳被召上候

一幸右衛門義被為召罷出御逢、平田方へ御糺シ事被仰付、御菓子被下之

一御庭方箒不足ニ付御奉行へ必至申立年々壱両ツヽ無急度増渡相成、御庭

　広ニ付而申立、先達而談済相成候事

一民部罷出恕介一時ニ御閑話被遊候、弾正罷出候、白玉糖一箱差上之

一寒中御拭ニ付職人共罷出此節是迄ハ御腰物方役所ゟ少々ツヽ心付致来候

　得共竹印ハ御酒御吸物被下、菱印も同断、丁子印方ハ無之と申も不相当之義故

　評義之上新御定外ゟ五十疋被下ニ取斗、尤暑寒両度共也、次郎右衛門へ相渡ス

　　　　卵子廿五寒中ニ付差上之　　　　　重寿

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　楽寿

　　　　金二百疋　御内証ゟも同断ニ被下之　矢嶋恕介

　　右者弾正ゟ表出方ニ而御文事御相手心配ニ付被下之、但高野前日被下之例

一鎌落前大奥御膳如例、夜分御〆切如例

一御夜詰四時過引

　　　　十二月十七日　晴　夜分一時斗雨

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　適斉

（二六四）

一五時過御神霊前御拝、夫ゟ御庭御拝も被遊候、恕介罷出如例

　　　　金五百疋ツヽ　　　　　　　　　　仲　野

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　富　田

　　　　同三百疋　　　　　　　　　若年寄　浪の

　　　　同弐百疋ツヽ　　　　　　　　　　　御中らう二人

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御側子共　壱人

　　　　蒸籠二組ツヽ　　　　　　　　　　　御前詰　弐人

　　右者此節柄何角心配致相勤候ニ付被下之

一昨日寒中伺御機嫌常邸御右筆部やへ可罷出之処御用引致候

一九時過大奥御膳如例　　一信良寒中ニ付罷出御逢御菓子被下之

　　　　塩たら二　御前様青松子へ被進被遣候　本多丹波

　　右者献上ニ付弾正ゟ披露在之候

　　　　白砂糖二袋　御錠口二人へ被下候由　甚十郎ゟ差出

一八半時頃ゟ御庭御閑歩被遊候

一尾張や鉄次郎御肴御用相勤青物も御用相達来候所近来諸色高置別而

　干物類弥増直上りニ付引合不申難渋必至歎願、四割増願差出候故夫々評

　義之上無拠次第ニ付先三割増申付候処甚難渋之趣なから誠ニ心配可仕旨

　畏り候由、愈引合不申節ハ又々願達仕度旨御用へやへも申達候由、則左大夫ゟ承候

一七半時過大奥御膳如例、夜分御〆切如例、金兵衛七半時頃ゟ退出致候

一御夜詰四半時前引

　　　　十二月十八日　晴　夜微雪

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　　診　宗甫

一五半時前両御拝、夫ゟ御庭御順拝在之、御臨書如例

一九時過大奥へ被為入御膳被召上候

（二六五）

一九半時揃御締切ニ而御納灸治被遊、御医師不残罷出両邸共金三郎・銀蔵

　御相伴被仰付、半紙墨被下之、信良御用引、元珉不快引、七時済益御機嫌

　御感も宜被為在候段申達此段等奉申上候

　　　　御前様ゟ　石かれ五召上り　　鉢盛きり酢　奥表半分ツヽ　配当例之通り

　　　　殿様ゟ　　御籠入　セんべい　窓の月　　　同

　　　　清心君ゟ　同九年　母　　　　大奥御取はやし

　　右ハ御納灸治ニ付御例為御慰被進之

　　　　御二所様召上り御菓子　玉椿　木目万寿　やうかん

　　　　　　　御熱菓子六寸重一　大奥ニて出来　せんべい　御沙汰在之、以来相止候事

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　窓の月

　　　　　　　御せん子二　莨入一　猪口一　　　御匙万貞・適斉　　　　　御直ニ

　　　　　　　御せん子二　たばこ入一　　　　　御いし不残、出勤無之共　　　被下之

一去ル八日立飛脚道中常振之所山の中三日逗留、今日到着、御静安恐悦之事

一為伺御機嫌十兵衛・弥六始一統罷出御灸治中ニ付御逢無之御菓子被下候

一弾正罷出如例

一今日飛脚到着、平八郎養父藤大夫義病気之所去月中ゟ追々差おもり既ニ大病

　之趣申来、依之対面差出ス、中君願之通被仰付、常邸支配迄願書差出ス

　即刻願之通被仰付候　折悪敷御家老中他行ニ而差図延引相成、七半時過平八郎

　出立御貸人壱人例之通、先

　　　　金二拾両拝借被仰付　　　　　　　　　上坂平八郎

　　　　梅か枝田夫一曲　　思召を以被下置之　同人江

一七半時過大奥御膳如例、夜分御〆切例之通り

一御夜詰四半時前引

　　　　十二月十九日　晴

（二六六）

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　主一

一五半時前両御例拝、夫ゟ御庭御順拝被遊候、御湯前ニ付夕方相成候

　　　　鴨一羽　御内々金兵衛ゟ差上之　　武田平右衛門

　　　　味噌漬雷魚一尾差上之　　　　　　大岩主一

一御臨書如例　　一九時過大奥へ被為入御同座御膳被召上候、御浴場

一常邸へ為伺御機嫌金兵衛罷出候、昨日当直ニ付寒中故

　　　　右鳬　御前様御伝ニて越中守様へ被進相成申候

一常邸ゟ御国廻り鴨肉被進召上り相成申候

一為伺御機嫌弥一郎罷出候、寒中ニ付御家老中同断ニ付罷出られ近江民部罷出

　幸右衛門御糺之義申上罷出候、何茂御逢御菓子被下、御目付罷出御用状入御覧候

一鎌落過大奥御膳如例、夜分御締切例之通り　殿様ゟ御そば被進御膳前

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御二所様被召上候

一御夜詰四半時前引　　　一金兵衛鎌落過退出致候事

　　　　十二月廿日　晴寒

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　適斉

一五半時前両御拝、御庭御順拝被遊、御臨書在之、恕介罷出如例

一九時過大奥御膳被召上候、暫御庭廻り被遊候

　　　　御前様へ　　鉢もり　切すし　　思召もの　六寸二　御くハし　御に〆

　　右者御納灸治被遊候ニ付被進之

一明番ゟ十大夫・幾太郎御馬拝借大シ河原へ来申元日御祈祷為頼罷越支度

　料壱朱ツヽ被下、昨暮之通り御初尾百疋持参、亀甲煎へい一箱差上之

　　　　金百疋ツヽ　御内証　　　　　　　石原甚十郎

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　近藤左大夫

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小林又兵衛

　　右者御膳所向何角引受心配ニ付被下之　但跡二日共金兵衛ゟ相渡ス

（二六七）

　　　　金壱朱ツヽ　出口御内用廻り　　　御用達五人へ

　　　　同百疋ヲ　　同　　　　　　　　　　御用へや五人へ

　　右者御広式御用人ゟ申立も在之、評義之上新御定外被進被下等心配ニ付被下之

　　　　金百疋ツヽ　御内証　　　　　　　　　　　　　　　適斉　主一

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宗甫

　　右者御締切中毎々被為召御都合ニも相成当年ゟ為御歳暮被下置候定式之

　　御帯代二朱共金兵衛ゟ相渡ス

　　　　金　三両ツヽ　往来失却被下　　　　　　　　　　　金三郎

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　銀　蔵

　　　　同　一両　　　勝手向必至難渋之趣故前段之訳を以

　　　　　　　　　　　内々申含金兵衛ゟ亥之助迄相渡ス　　銀蔵

　　　　同　弐歩ツヽ　出精ニ付失却当年ゟ増被下候　　　　熊吉

　　　　　　増共一両　　　　　　　　　　　　　　　　　　岩吉

　　　　同　二朱　御内用廻り　昨年ゟ壱人増ニ付　　　助　御下男壱人

　　　　同　五十疋　同　当邸御用節ニ付被下之　　　目付　久能作右衛門

一台子交代ニ付御供道中ゟハ出物格別之違ニ而身小之者甚難渋之申立在之相違も無之

　訳合故御奉行甚十郎へも様々及内評候所先例も無之類様ニ相障難評、依之当邸ハ

　別段御人少精勤之義故為御手当当春ゟ月割を以被下置、正月ゟ丸勤之者ヘハ二両

　被下置候旨御奉行ゟ申聞候事　但御手元ニ而ハ道中御手当之廉へ引当候筈

一弾正罷出如例、七半時過大奥御膳如例夜分御締切例之通

　　　　雲州橘十一　此頃不快ニ付被下之

一御夜詰四半時前引

　　　　十二月廿一日　晴　厳寒　卅度

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　宗甫

一五半時前両御拝被遊、夫ゟ御庭御拝在之候、御臨書如例

一今日常邸天璋院様ゟ歳末ニ付御広式番之頭御使在之金兵衛御用引

（二六八）

一恕介罷出如例　一九時過大奥御膳如例

　　　　御二所様江　交御肴壱籠　たい一召上り跡半分ツヽ

　　　　清心君ゟ

　　　　中将様江　　八寸重二　御吸物仕立　召上り　唐万寿同断

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　重寿楽寿被下之候

　　右者寒中御機嫌被為聞被進之

　　　　小鱸一　石かれ壱　砂糖御返被下之　甚十郎へ

一九半時御供揃八時過殿様被為入御対顔夫ゟ大奥御対面無程御帰座、三色牡

　丹餅并唐饅頭差上之大奥ゟも唐万寿被進之、暫御人払御用在之、此已前御供

　之面々被為召候、十兵衛義も罷出居御供頭伺御機嫌罷出候、御帰殿七時前

　　　　御二所様へ　　六寸重二　御干くハし　御汁仕立鍋やき品召上り御くハし半分ツヽ

　　　　殿様ゟ

　　右者御入ニ付被進之

　　　　十年母二ツ差上之　壱ツ竹印へ被進之

　　　　　　　　　但日向国飫肥産物

一七時過御庭廻り被遊候、七半時過大奥御膳如例、金兵衛退出致候事、夜分御〆切如例

一御夜詰四半時前引、表御締切御寝

　　　　十二月廿二日　晴寒

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　主一

一五時過弾正罷出御用在之候

一五半時過両御拝被遊御庭御順拝被遊候

　　　　綿子一　大奥出来　御昼一ツ　　　野本帰祭

　　右ハ先達而喜十郎ゟ廿一浪銭差上ニ付御内々思召を以昨夜喜十郎被為召候而

　　御直ニ被下置候事

　　　　干海苔二帖ツヽ　　　　　　　　　大沢淡水

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　荒川南山

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　水野風月

　　右者思召を以被下置候、過日茶一箱差上之、治部ゟ奉簡を以今便相廻ス

（二六九）

一六日振道中ニ而今晩飛脚被差立候也、恕介罷出暫御噺申上候

　　　　御附御近習被仰付　　　　　　　　大御番　渡辺蓬太郎

　　右者於御用部屋被申渡御前御礼相済当邸へ罷出金兵衛差加御礼申上候

　　七時過ゟ如例見習相勤御明り付退出致候、御小や三郎助相宿ニ割入之

一九時過大奥御膳如例、暫時御庭御閑歩在之候

一去ル十六日立、寒鱈山之内滞留今日到着、左之通り如例相廻ル

　　　　御二所様御相合ニ鱈一本越中守様へ被進之

　　　　中鯛三　鰈三　蟹一甲　たい一召上り　同一歌島・田川　同一左膳・六大夫江

　　　　　　　　　　　　　　　かれ一　かに一　青松殿へ　かれ一ひな同一富田等へ被下候

一七半時過大奥へ被為入御膳被召上候、夜分御〆切如例

　　　　殿様ゟ　溜池御席上思召　御仕立肴盛合　折詰一　仲のへ被下候由

　　　　　　　　ニ而被進之

　　右者佐治・恕輔ゟ此方へ相廻候ニ付入御覧候、手紙往来之事

　　　　鳧一羽内献之、過日嵐そば二升呈之　両様召上り　金兵衛

一御夜詰四半時前引

　　　　十二月廿三日　陰寒

一御目覚六半時　蓬太郎見習御明り付迄　診　適斉

一五半時前両御拝被遊夫ゟ御庭御拝被遊候

一御家老中并弾正大奥女中富田結構被仰付ニ付被罷出、御機嫌被相伺御

　菓子御茶被下置候

　　　　因幡木綿一反　毎々差上物ニ付　　　稲垣治部

　　　　青屋木綿一反　何角御セ話申上ニ付　石原甚十郎

　　　　同断　　　　　　　　　　　　　　　金兵衛

　　右者思召を以御直ニ被下置之

（二七〇）

　　　□□

　　　　帯地壱　毎度召ニ付　　　　　　　愛五郎

　　　〃

　　　　同　　　毎度召且差上物ニ付　　　留三郎

　　　〃

　　　　同　　　同　　　　　　　　　　　門太郎

　　右之通御前ニて被下之

一九時過大奥へ被為入御膳被召上候

一為伺御機嫌弥一郎・平大夫始一統罷出被為召御菓子被下置之

　　　　御袂落一　中平猪口一　宛　　　　桑山十兵衛

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　井上弥一郎

　　右者不相変御直ニ被下之

　　　　御袂落一　中猪口一　扇子二　　　近藤左大夫

　　右者毎々差上物も致日々罷出御懇意之事故御直ニ被下之

　　　沖津たい

　　　　蒲鉾一枚箱入　召上り相成

　　右者昨日殿様溜池様へ被為入御携相成候を思召を以剛右衛門持参被進之

　　　　御二所様へ　　　　八寸二重　御仕立肴　召上り

　　　　伊予守様ゟ　　　　　　　　　御生菓子　殿様へ御取分少々被進之

　　右者久々御尋も不被為在寒中御障も不被為在候や御見廻被仰進、此御品御軽

　　少なから御慰ニ被進度旨御口上ニ而御広式御用人迄為御使三富甚左衛門罷出候段

　　御用人ゟ承御品受取之及披露候、御用人ゟ可然御相□申達ス

　　　　伊予守様へ　塩雷魚壱本　干鱈一本

　　右者御二所様ゟ被進ニ付御用人迄相廻同人ゟ相達申候

一近江罷出御閑話被遊候、七半時前金兵衛退出致候

一七半時過大奥へ被為入御膳被召上候、夜分御〆切如例

一御夜詰四時引、宗伯被為召

　　　　十二月廿四日　晴　長閑

（二七一）

一御目覚六半時　蓬太郎罷出御明りゟ退出　診　宗甫

一五時過両御拝被遊夫ゟ御庭御拝在之、弾正罷出御用在之

　　　　練羊肝一箱　到来ニ付差上之　　　左大夫

　　　　金五十疋　　今般結構被仰付ニ付上り　老女　富田

　　　　御二所様へ上り　交肴　海老一　石かれ一　大鱸一　小枝

　　　　　　　　　　　　　　　　召上り也

　　　　御同所様ゟ被下置之　大すヽき一　　　　　　富田へ

　　　　御二所様ゟ　御小重二御寿し　鉢盛　硯ふた物　常邸取斗之

　　　　清心院君へ　　　　　白玉并あん

　右者寒中ニ付老女参上之節思召もの御側御慰もの被進之

　　　御召帯一筋　　　　　　　　　　　　草尾精一郎

　　右者毎度差上物致候ニ付以前御側向も相勤候事故思召を以小十郎ゟ相伝

　　被下之　　　　　　　　　　　　御錠口

　　　　鼻紙二束　墨染ちりめん服紗一宛　石野

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　磯田

　　右者当夏二人勤困窮相勤ニ付思召を以被下服紗ハ御仕事其外袋様

　　之毎々致差上ニ付被下置之、金兵衛ゟ相渡申候

　　　　呉路服莨入筒付莨一包　御裏役心得御鉄砲懸り心得　山野十大夫

　　　　　　　　　　　　　　　其外時計割方等被仰付

　　　　同　　　　印刻毎度被仰付ニ付　　河崎三郎助

　　　　金五十疋　万国旗章其外御用被仰付ニ付　上坂平一郎

　　右者細記之訳ニ付被下置之

　　　　黒呉絽莨入筒共　御直ニ被下候　　斉藤民部

　　　　烟草二包　　金兵衛ゟ相伝へ申候　田代万貞今日罷出

　　　　紫太織中形一犬□　　　　　　　　よねへ

　　　　練羊寒一箱御有合ニ付　　　　　　島田近江

（二七二）

　　　　小倉帯地一　　　　　　　　　　　秋田弾正

　　右者当年御暫之事故軽品御直々被下置之

　　　　小紙一束　□□袖一　　　　　　　松井左膳

　　　　同　　　　　　　　　　　　　　　森　六太夫

　　　　金二百疋ツヽ　定式御セいぼ被下　御附両人へ

　　　　同　　　　　　毎々給被仰付ニ付被下之　左膳へ

　　　　小紙一束　　　　　　　　　　　　坪井信良

　　右者遠西奇益述一冊差上、旦毎々少々ツヽ御用被仰付旁被下置之、金兵衛相渡

　　　　茶呉絽莨入筒廿　莨二包　　　　　松浦幸右衛門

　　右者着之砌御筆洗花生差上少々御用も被仰付ニ付旁被下置之

　　　　金壱両　表仕出被下在之二両　　　千種宗伯

　　右者当春来毎々御按摩差上ニ付御内証ゟ被下置之

　　　大名小路

　　　　御二所様ゟ　朝鮮飴一曲　佐賀関鯣十枚

　　右者御前様ゟ御伝へニて鴨并生鱈等被進之為御返御伝へニて被進之

　　　　御同所様ゟ　　　　交御肴一箱　御挨拶被下候由　甚十郎

　　　此御二所様へ　　　　　　　　　　　　　　　　　　又兵衛江

　　右者寒中ニ付御機嫌被為聞被進之

一九時過大奥御膳如例引続定例御浴湯

一伺御機嫌重記民部御目付并所左衛門罷出何茂御逢御くハし被下置之

一七半時過大奥御膳如例夜分御〆切如例

　　　　御二方様分　干鱈一　塩煮魚十　御肴荷物着ニ付常邸ゟ相廻ル

　　　　殿様ゟ　　　鳬一羽被進之

一委細之義ハ去ル廿日記之通御奉行ゟ別紙之通可申渡旨奥番へ申聞候ニ付申渡ス

（二七三）

　　　　　　　　　　　　　　　中将様御附勤番御坊主共

　　　　中将様御附振退勤被仰付談合も在之ニ付別段之御評義を以為失

　　　　却当年ゟ詰中毎年金二両ツヽ被下之

一御警立役之者振道中失却多甚難渋必至与申立何卒椀奉行格御取扱ニ被成下

　候様歎願届出候所今度御憐評之上附紙ニ而三折ツヽ当年限り被下候旨御奉行与り

　御膳番へ達在之ニ付申渡ス　但来申暮歎願致候ヘハ御評義可在之趣承ル右本文之訳柄ニ付

　　　　　　　　　　　　　　　御内□ゟ為御償□□被下都合壱両ニ相成前記御坊主失脚金被下相当ル

一御夜詰四半時過引

　　　　十二月廿五日　晴

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　主一

一五時過両御拝被遊夫ゟ御庭御順拝被遊候、恕介罷出如例

一当番割思召を以左之通被仰付候

　　　　壱番側　　　　　　　　　　二番側

　　　　　　　五市太夫　　　　　　　　　岩次郎

　　　　　　　小十郎　　　　　　　　　　十太夫

　　　　御梯　喜十郎　　　　　　　御梯　幾太郎

　　　　　　　亥之助　　　　　　　　　　三郎助

　　　　　　　誠次郎　　　　　　　　　　蓬太郎

　　　　　　　　熊吉　　　　　　　　　　　岩吉

　　　　御二所様ゟ　籠之内　煎餅　おこし

　　　　清心君江

　　右者御納灸治被遊ニ付被進之

　　　　金壱朱　　　　　　　　　　　　　土屋小六

　　右者御合力御初穂寸志差上之

一常邸へ為伺御機嫌金兵衛・五郎太夫初一統罷出候

　　　　八代みかん十斗御福分被進之　但御前様ゟ被進候由已来被進ニ不及事

一九時過大奥御膳如例御帰坐後暫御庭へ被為入候　弾正罷出如例

（二七四）

一為伺御機嫌次郎右衛門・太郎太夫罷出御逢無之

　　　　雁皮紙全紙廿枚阿州産到来ニ付差上之　埴原次郎右衛門

　　　　八寸重二御そば　煎餅召上り相成

　　右者蓮性院様ゟ寒中御機嫌被為聞被進之干だら壱御返し被進之

一御茶方両人江十徳代二歩一朱壱人前出ル　常邸□　　　　　　　同御内証詰越金壱両被下

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　栄立一反御古召代出ル

　　　　葡萄鼡山マエ入縮緬一反一両三歩三　塩だら一本

　　右者青松院殿へ年中差上物度々被致為御返し被遠之

一七半時過大奥御膳如例夜分御〆切如例、御夜詰四半時前引金兵衛退出

　　　　玉子弐拾差上之　　　　　　　　　御礼　はる

　　　　金百疋如例被下之　　　　　　　　　　　同人へ

十二月廿六日晴御目覚六半時診適斉両御拝御庭御拝被遊恕介罷出如例九時過大奥御膳如例弾正罷出ル

一七半時過大奥へ被為入御膳被召上候夜分御締切如例

　　　　清心君ゟ　六寸重一　御生くハし　養寿罷出候折から被進之　御〆切中御用

一犀次郎為伺御機嫌罷出被為召御くハし被下候　亀甲せんべい一箱到来ニ付差上之

　　　　銀拾枚ツヽ　　　　　　　　　　　松井左膳

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　森六大夫

　　右者年来精勤別而遠路大儀ニ付弾正ゟ被下置之

　　　　金五百疋　　　　　　　　　　　　　六太夫

　　右ハ何角御世話申上ニ付弾正ゟ被下置候事　但二人共御内用歟

　　　　御二所様へ　　御交肴台居　こい二　ほら二

　　　　伊予守様ゟ　　　　　　　　たい一　召上り相成

　　　　清心君ゟ　　　鯉三喉

　　右者先達而御婚姻之節被進物為御膳被進之、たたら二　ほら二

一奥番四人年中御買上物格別心配数多被仰付ニ付右鯉三喉被下取斗フ

　　　　炭代壱歩ト百七十□文八九半　定式渡り

　　　　同二朱ト百七十七文　小炭五俵　昨暮ゟ御手当昨年ゟ相止

（二七五）

　　　　同壱歩二朱ト三百弐十四文　五俵七分代　一俵ニ付四匁五分　御近習部や十俵八分増出来也

　　　　　　　　　　　　　　　　　但　段々申立ニ付出来候事

　　右者追々御道具役ゟ受取候事

　　　　御二所様へ　尾張大根一本到来ニ付差上之　甚十郎

一御夜詰四半時前引

　　　　十二月廿七日　陰

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　宗甫

一五半時前両御拝被遊

一明後廿九日御二度之節来春二日御替日御精進当年ゟ思召を以被相止候御膳番承出

　　　　金五十疋　　　　　　　　　　　　御右筆　林五右衛門

　　右者御年表書継致差上候ニ付御用人ゟ内達も在之被下ニ取斗

　　　　梅一株　紅白献上　　　　　　　　稲垣治部

一殿様今日天徳寺惣御参詣被遊候　恕介罷出如例

一九時過大奥へ被為入御膳被召上候御庭御徜徉被遊候、民部罷出ル

　　　　御前様ゟ　八寸重二　御汁こ仕立召上り　御到来ニ付被進之

　　　　　　　　　　　　　　いり豆ふ

一御夜詰四半時引夜分御締切如例、金兵衛七時前ゟ退出致候事

　　　　十二月廿八日　晴

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　主一

一五時過両御拝被遊夫ゟ御庭御順拝被遊候、恕介罷出暫御話被遊候

　　　　金二百疋　　　　　　　　　　　　よつ

　　　　同百疋ツヽ　　　　　　　　　　　柏木

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　若竹

　　右者御内々毎々差上物致ニ付被下之

一為伺御機嫌御家老中被罷出御逢被遊大平猪口一御半切一〆被下置之

（二七六）

一九時過大奥へ被為入御膳被召上候　常邸御側向非番之面々万貞順庵罷出ニ付被為召歳末

　　　　　　　　　　　　　　　　　之御祝義申上候、御菓子被下之候、今日ハ御供へも被下取斗

一殿様六半時御供揃御登城、御退出懸八半時被為入御対顔歳暮之御祝

　儀被仰上御長蚫差上御一所ニ大奥へ被為入御対面御目録御取替セ在之

　老公者御残当公ハ御帰座、御附両番揃上下着歳暮御祝義申上、晦日ハ不罷出御上下

　被為取、御吸物さヽめき御中皿御さしみ御酒被進引続御小弁当被召上御汁つみ入御中皿

　やき鱚差上之、相済御上下差上御縁先ゟ被為入歳暮ニ付御庭惣社御拝被遊、御

　先立喜十郎以後共此方御裏役相勤被供物ハ常邸御裏役献備之、十兵衛始両へや随従

　奥坊主一人罷出候、無程御帰座末記被進物差出ス、御菓子被進大奥ゟも御くハし被進候

　御供頭三人御機嫌相伺御供之面々被為召御目見被仰付御くハしへや下、過刻適斉

　御機嫌伺罷出被為召御酒御吸物御下タ被下之、弾正罷出居御供揃被仰出七半

　時過御帰殿被遊候　但御膳済御清メ香御嗽御手水差上之

　　　　殿様江　御詠草添紅梅一鉢　　　玉川唐紙半切二〆四百枚斗

　　　　　　　　　　　　福寿草小鉢一

　　右者今日於御席上被進之

　　　　殿様ゟ　御筆一対雲鶴遊天　御籠之内御小肴召上り

　　　　　　　　白梅垂レ一鉢

　　右者今日御入之節被進之　但右御肴召上り跡小肴被下之　治部へ

一来春三献之内御吸物斗当春之通り被進ニ付、今日御膳番ゟ御献立書相廻り入御覧候

一七半時過大奥へ被為入御膳被召上候、夜分御〆切如例

一大奥御寝、御夜詰四半時過引

　　　　十二月廿九日　晴

一御目覚六半時、表ニ被為入　　　　　　　　診　適斉

一五時過両御拝被遊、夫ゟ御庭御順拝被遊候、恕介罷出御噺被遊候

（二七七）

　　　　干鱈一尾ツヽ　　　　　　　　　　大道寺七右衛門

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　真杉所左衛門

　　右者御有合故折々差上物致旦久敷□□□□ニ付被下置之

一常邸へ惣名代ニ金兵衛罷出上下着歳末之御祝義申上之　御莨入筒共扇子二被下置之

一九時過大奥へ被為入御膳被召上候、定日御湯被為召候

　　　　殿様へ　御籠之内小肴三段

　　右者歳暮之御腥ニ被進之　御定式相成可然事

一為歳暮御祝義勘解由・重記・近江・御目付并弥一郎等罷出何茂鳥渡御逢在之

　　　　金二百疋　去暮も差上　　　　　　　　　三寺剛右衛門

　　右者御内々為冥加御二所様へ差上之

　　　　青屋木綿一反御盃壱　　　　　　　同人へ被下置之

一七半時過大奥へ被為入御膳被召上候、六時過ゟ御締切相成甚十郎御酒差上ニ付今晩

　御取開相成、治部・甚十郎・左大夫・金兵衛・宗甫・岩次郎始当番於御前御酒頂戴被仰付

　御肴・煮付・大こん・寿し・みかん表ゟ差出ス、大奥ニて豆ふ・貝の柱吸物出ル

一御夜詰四半時前引　金兵衛五時過ゟ退出致候事

　　　　十二月晦日　夜来小雨

一御目覚六半時　　　　　　　　　　　　　診　宗甫

一五時過ゟ御神霊前御注連縄御懸替其外御飾付出来歳暮御極り御備物

　被供御拝被遊候、恕介罷出御咄被遊候

一去ル廿一日立飛脚二日山之内逗留今朝到着、御静安恐悦之事

　　　　緑頭鴨二羽　　　　　　　　　　　川村藤一郎

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　長谷川源之丞

　　右者御二所様へ差上之

　　　　金三百疋献上　　　　　　　　　　三国湊　栗屋伊兵衛

（二七八）

　　　　清心院様ゟ　紅梅　松竹　福寿草　鉢植

　　右者歳末ニ付被進之　福寿草小鉢一　　　　御詠草添被進之

　　　　　　　　　　　　甲州産小くハし箱一

一御庭御順拝被遊ニ付歳暮御代拝ハ不相勤御直拝被遊候、御間内ニて御嗽御手水御清メ上ル

一九時過大奥御膳如例　民部鳥渡罷出候

　　　　御前様ゟ　鉢もりそは露付　御酒一徳利

　　右者歳末ニ付御側為御慰被進之　奥表半分ツヽ　両番一統被下候

一七半時過大奥御膳被為召上り　一御神霊前歳末御拝被遊候、御福茶差上之

一御前様へ歳末之御祝義御広式御用人迄申上又兵衛義罷出候

一七時ゟ金兵衛上下着、一統継上下着暮時金兵衛・五郎太夫ゟ熊吉・主一別席歳暮之御祝義

　申上ル、先刻犀次郎為御祝義罷出御逢無之候

一七半時前弾正罷出御締切相成、老女へ御手目録如例被下置、御品金兵衛ゟ相達ス

　　　　金五百疋ツヽ

　　　　同三百疋

　　右昨年ハ二百疋御減相成候へ共去月当邸振退勤ニ□

　　　　金拾五両表御出方

　　右者老女御充行替り御側御用人ゟ被相渡候

　　　　銀五枚

　　右者長詰ニ付被下置之、御側御用人ゟ被相渡候、熊□□

一六半時頃ゟ於御三ノ間御酒頂戴在之、甚十郎・左膳・金兵衛当番

　罷出候大こん肴に付寿しみかん豆ふ吸物頂戴之御そばニて何茂□

　　　　除夜御詩歌拝戴被仰付　　　　　　金兵衛

一御夜詰四半時前引

（二七九）

　　　　酒二升そば三ツヽ被下取斗　　　　手伝

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　台子小遣□

一四方暦如例年部屋々へ被下ニ相成申候

一来春ゟ御内庭新御宮并御内仏清正公御備小鏡餅奉